〈小特集：古今集一一〇〇年によせて〉

●古今伝授と徒然草の秘伝

徒然草の「しろうるり」

―古今伝授の周辺―

川平　敏文

まくら

落語に「あくび指南」という一席がある。流行もの好きの江戸っ子が、何かもの珍しいものを習いたいというので、友人を連れて「あくび指南」という看板の掛かった家の門を叩く。現代風に言えば、「あくび講習所」である。さて先生が出てきて早速講釈と相なり、まずは先生があくびの手本を示す。

場面は昼下がりの隅田川。舫ってある小舟を、波がゆらり、ゆらりと揺らしている。体をゆっくりと前後させながら、おもむろに煙管をくゆらす自分。そして次の台詞。『船頭さん、舟を上手へやっておくれ。これから堀へ上がって一杯やって、晩には吉原へ行って新造でも買って、粋な遊びでもしましょうか。……（しばらくの間）。あー舟もいいが、それにしても、タイクツでタイクツで……。ふわ～ァ（あくび）、ならねえ』。先生「ハイ、まずはこれをやってみてください」。

入門の男は「えぇーっ、そいつをやるんですか」などと驚きながらも、一応、手本通りにやってみる。しかし、演技や台詞に変に力が入ってしまい、なかなか先生のような自然なあくびにはならない。オチは楽しみのために敢えて書かないこととするが、それにしても、何とも暢気なお稽古ごとではないか。あくびという、人間の行動の中でも一番間が抜けた行動を、しかつめらしく「指南」するというその所に、何とも言えないおかしみがある。

話は変わって徒然草に飛ぶ。その第六〇段に、芋頭の僧都こと真乗院の盛親僧都の話がある。著名な話だと思うが、一応筋を書き記しておこう。

真乗院の盛親僧都は芋頭（サトイモの塊茎）が大好物。お説教の最中にも必ずこれを欠かさない。その芋頭好きたるや、先代の住職から引き受けた寺の財産を、一切このために費やしたというほど。その盛親僧都があるとき、一人の僧の顔を見て「お前は『しろうるり』のような顔をしておるな」と言った。『しろうるり』みたいな顔とは、いったいどんな顔ですか」。「そんなものワシもしらん」。

盛親の奇行はこればかりではない。法事などで膳が出れば、皆が着座するのも待たずに食べ始め、自分が食べ終われば勝手に立ち退く。寺で定められた時間通りには絶対に食事を取らないし、眠ければ昼から奥の間に引きこもり、

目が覚めれば何日も寝ないで嘯き歩いたりする。かくのごとく放埒な人柄ではあったものの、僧都はたいへん高徳なお坊さんとして、皆から尊敬されていたという。

「しろうるり」。高徳の僧の言葉であるだけに、実は何か深い意味があるのかもしれない――。後世、江戸時代には、「しろうるり」とは何かということがそのように真面目に考えられ、何と「口伝」にまでされた。現代の解釈では、「しろうるり」とは一種の擬態語で、のっぺりとしたとか、つるりとしたような状態を、盛親が勝手にそう表現したのだとされる。つまりは彼が生み出した造語と考えるのである。したがって、その意味を真面目に考え、さらに伝授までするというのは、現代から見ればさながら「あくび指南」のごとく滑稽至極な話なのである。

本稿ではこの「しろうるり」を中心に、江戸時代における徒然草伝授のことを紹介したい。『古今集』に「三ヶの大事」があるように、徒然草にもそれがあり、一部では古今伝授と抱き合わせて伝えられていたのだ。

徒然草伝授の成り立ち

徒然草が、江戸時代になってようやく本格的な考究が始められた比較的新しい古典であるということは、前号に記した通りである。その注釈書の嚆矢と言われるのは、秦（寿命院）宗巴という、豊臣秀次・徳川家康に仕えた医師が著した『徒然草抄』なる書物であった（慶長九年刊）。彼の院号をとって、今は「寿命院抄」と通称されている。

医師がこのような文学作品の注釈を手がけるというと、何かお門違いのような気がするが、この当時の大名や貴人に仕える医師は、主人の下問に従って和漢の故事来歴を講釈したり、能や連歌といった芸事の相手役なども務める、いわゆる御伽衆の一員であることが多かった。したがって彼らは単に医学に関する知識や医療の実践のみならず、文事全般にわたる幅広い知識を身につけていることが要求されたのである。宗巴の場合は源氏物語の講釈をしたこと、香道に関してかなりの知識を有していたことなどが伝えられている。その彼が近頃人気の徒然草を取り上げて、己れの専門領域たる漢学の知識を駆使しながら注釈を付けたのが、この『寿命院抄』であった（因みに彼は熊本にゆかりの深い細川幽斎とも交流があり、幽斎の『九州道の記』にその名を見せている）。

ところで、この『寿命院抄』の中には先の「しろうるり」を含め、どこにも口伝などという言葉は見えない。『寿命院抄』の次に刊行された林羅山の徒然草注釈書『野槌』（元和七年成・刊）においても、それは同様である。徒然草に口伝という言葉が出てくるのは、その次に出た松永貞徳の『慰草』（慶安五年跋・刊）からである。

貞徳と言えば、歌学を町人階級に広く紹介し、また俳諧

をも普及させた人物として近世文学史上重要な人物であるが、彼には若い頃、次のようなエピソードがある。

時は慶長。後に徳川家康の側近として抜擢される林羅山、若き医学生遠藤宗務ら気鋭の学徒達が集い、和漢の典籍の講釈会を行った。彼らが取り上げたテキストは、朱子の『四書集注』と『太平記』。いずれも、日本では未だ本格的な紹介や学問的討究が為されていない書物であった。その講釈会に、彼らより少し年長の貞徳も誘われて、徒然草の講釈を依頼された。貞徳は若き学究たちの学問への探求心に刺激されたのか、徒然草の「大事の名目」を人目をはばからず「読みちらし」た。しかし後に彼はこの時の行為が、師である中院通勝の不興を買っていたということを知り、心から後悔したという。

ここで言われる「大事の名目」とは何か。それは貞徳の自叙伝『戴恩記』に、通勝から授かった口伝の一つとして見える徒然草の「切紙」のことであろう。とすれば、通勝の時すでに徒然草にも伝授が存在したことになる。その内容の具体は『戴恩記』には詳らかにされていないが、『慰草』によれば、徒然草の次の三つの章段に、何らかの口伝があったことだけは分かる。各章段に対する貞徳のコメントを引用しておこう。

・此段はいま〳〵しき段なれば講釈もせぬがよきなり。

是、相伝の説なり。しかしながら、三ヶの大事一ヶ条此段にこれあり。（第二八段）

・此段には、此物語の三ヶの大事一ヶ条こもりてありと云々。（第六〇段）

・此「放免」、今の世に伝へしる人なしと云々。此一部の三ヶの大事の其一つとうけ給侍る。（第二二一段）

貞徳はこの三つの章段に「三ヶの大事」が含まれるというのであるが、当然ここには、その内容までは明らかにされない。では、それはいかなる内容であったのか。ここでは三ヶの大事のうち、第六〇段の「しろうるり」に絞って見てゆくこととしよう。

磐斎と季吟

「しろうるり」の大事とは何か。貞徳の後、この問題をめぐって最初に見える発言は、貞徳晩年の弟子、加藤磐斎の『徒然草抄』（通称「磐斎抄」、寛文元年刊）である。

磐斎は言う。「しろうるり」のことを、大事などと言う人がいるが、貞徳先生はそうはおっしゃらなかった。この段の秘事というのは、「しろうるり」という言葉そのものではない――。確かに磐斎が言うとおり、貞徳は第六〇段に秘事があると言っているだけで、「しろうるり」という言葉そのものが秘事であるとは明言していない。しかし磐斎の頃には既に、「しろうるり」という言葉そのものが秘事であるとする説が存在したようである。その一端。

「しろうり」をこの僧都、言ひ損なひて「しろうるり」といはれしを、人に問はれて「我も知らず」と言はれし也。これは「しろうり」にて侍るといふが秘事なり、と伝へぬると聞き侍る。

盛親僧都は、本当は「しろうり」のような顔、と言いたかった。漢字を宛てれば「白瓜」で、色白で瓜実形の顔といったところか。そこを思わず「しろうるり」と言い間違ってしまったので、それは何ですかと問われた時、「我も知らず」と返答したのだというのである。

磐斎はこの説を「不審」とする。それでは磐斎が貞徳から聞いたという秘事とは、どのようなものだったのだろうか。是非聞きたい所であるが、口伝である以上、やはり磐斎もその具体的な内容は示さない。ただ彼の書きぶりから推測するに、奇行が多いけれども人々から尊敬されていたという盛親僧都の高徳、それを読み取ることこそがこの段の秘事なのだと、言いたげではある。

さて、同じ貞徳の弟子でも、磐斎のように口伝の内容に関して何らかのコメントをするのではなく、ほとんどノー・コメントの姿勢を見せるのが北村季吟（きぎん）である。季吟という人は磐斎と謂わばライバルのようにして、日本古典の注釈書をたくさん編述し、その普及に努めた人。特に源氏物語の注釈書である『湖月抄（こげつ）』は著名で、全六十冊というその圧倒的な分量のためにもよるが、江戸時代を通じてこれを凌駕するテキストを遂に生み出さず、源氏物語の代名詞ともなった。当時の古典学の提要を余さず漏らさず、実にツボを押さえた形で開陳してくれたのが季吟の古典注釈書群で、その点、磐斎のやや饒舌気味の注釈とは好対照を為している。

季吟の学問は、俗に言えば折り目正しい学問である。折り目が正しいとはどういうことか。私意を挟まず師説を祖述することである。

しろうるり　貞徳云、此段には此物語の三個の大事の一個条こもりてありと云々。即（すなはち）此所也。

まさしく貞徳の説をそのまま引用するのみで、もちろんその内容は明かさない。だが、季吟は「しろうるり」という言葉そのものが秘事であると言っており、この点は先に引いた磐斎の言に照らし合わせて、やや注意が必要である。

ところで、後に季吟が将軍綱吉側近の柳沢吉保か誰か、ともかくも相当の貴人に呈上した徒然草注釈書に、『徒然草拾穂抄（しゅうすい）』（元禄十七年識語、北村季吟古註集成20所収）という写本がある。その巻末には「徒然草之三ヶ大事」として、版本には記されなかった次のような内容が書かれている。それはまさしく、季吟が版本で黙秘していた口伝の内容に他ならない。

是は草子（＝徒然草）にも盛親僧都、「我もしらず」と申候へば、その体（＝実態）ある事にはあらず候。彼

の僧の顔を「白瓜」など思ひよそへていはんと仕候に、ふと「白うるり」と申損じ候を、「とは何物ぞ」ととがめし時、僧都屈せずして「我もしらず。もしあらましかば、此僧の顔に似てん」と申せし詞、此僧都の弁舌、人にすぐれ申候よしをかき申し、次の詞にかけて、おもしろく御座候とぞ。

すなわち季吟は「白瓜」説を述べているのであるが、これは磐斎が「不審」として退けた説とほぼ同じではないか。とすれば磐斎は季吟の講説を念頭に置いて、これを「不審」としていた可能性がある。実は「三ヶの大事」をめぐっては、季吟の方も磐斎にライバル心をむき出しにしていたような所があり、例えば第二二一段「放免」の口伝については、季吟は磐斎の説を批判して、「此説は放免の事を貞徳に聞かざるか」などと挑戦的なもの言いをしている。これを見れば磐斎と季吟との間に、師説の継承をめぐって何らかの確執があったことは明らかである。

ただし、磐斎の退けたある説は、「しろうるり」＝「白瓜」という謎解きそのものを秘事とする説であったが、季吟がこの言葉を秘事とする理由は、そういった謎解きではないようである。徒然草ではこの逸話のすぐ後に、盛親を評して「能書・学匠・弁舌、人にすぐれて」という文章が出る。自分が言い間違っても逆に相手を言い負かす盛親僧都の弁舌の闊達自在さ、それをこの「しろうるり」の逸話から読み取ることが秘事であると、季吟は言うのである。したがって、もし磐斎の「不審」が季吟の説を想定していたとするならば、磐斎はそれを若干誤解していたことになろう。

ともあれ、泉下の貞徳先生、果たしてどちらを真意と言ったであろうか。

続出する珍説・奇説

何でもないことでも、一たび秘伝などと言われると、それを知りたくなるのが人情というもの。前述したように、貞徳門弟の二大古典学者の間でも、その見解については既に食い違いを見せているのであるが、逆にそれゆえにこそ、徒然草の「三ヶの大事」なるものの実態は、衆人の興味をそそったもののようだ。

ここに高田宗賢（そうけん）という人がいる。若い頃、彼はこの秘伝を知りたくて知りたくてたまらなかったが、遂に知ることができなかった。しかしある時、玄旨法印細川幽斎の書付なるものを見出して驚喜した。なぜならばそこには秘事・伝授なる言葉はなく、いま世間で秘説などとされている条々も、ただ淡々と解説されているからであった。「三ヶの大事」なるものは、本来存在するものではなかったのだ——。宗賢の『徒然草大全』（延宝五年刊）の巻頭には、そのような「三ヶの大事」批判の言辞が述べられている。宗賢の得たというこの書付なるものが本当に信頼できるものなのかどう

かは分からないが、ともあれ、しばらくその説を拝聴してみよう。まず宗賢は、世間で次のような「しろうるり」の説があることを紹介している。

一義に云、「しろう」と句をきりてよむが大事ともいへり。又一義に云、『源氏』の雲隠の大事、これにかなへりともいへり。是は田舎の人のかたりしなり。

一つめの説は、「しろう」「るり」と句を切って読むという説。これは何とも意味不明の説である。二つめは、これが源氏物語の「雲隠の大事」と呼応しているという説。「雲隠の大事」とは、源氏物語の逸巻とされる『雲隠六帖』に関する秘伝なのだろうが、これまた何やら大げさなものである。

宗賢はさらに先に見た磐斎の説も引いた上で、ようやく私見を述べる。

右の説々は強ゐて義を求めたりといふべき歟。此正説は、シロウカリと云が本心なり。むかしは植字といふ物に致せし時、「か」を「る」に取り違えたると見えたり。さて「しろうかり」にて義理をとらば、盛親の異名を付けらるゝ僧ならば、思ひやるべし。愚癖・胡乱なるに、顔ノ色白くして、うっかりとぞ聞えたり。

「しろうるり」とは、実は「しろうかり」が正しい。色白でうっかり者、それで「白うかり」。それを昔、「植字」（活字）で本文を組んだとき、「か」を「る」に取り違えたのだというのが、宗賢の所説である。要するにこれは誤植説で、それは古活字版が隆盛した江戸初期頃に起こったと推定しているのであるが、室町期の古写本には既にきちんと「うるり」と記されているから、この説は明らかに誤りである。しかしこの説は当時の人がいかに強く、徒然草を江戸期以降の古典であると認識していたかを物語ってくれて、その点は興味深い。

珍説・奇説はその後も後を絶たない。浅香久敬『徒然草諸抄大成』（貞享五年刊）によると、次のような説が紹介してある。

或説に「しろうるり」とは「白得利」と書く。されば白の字を「なまなか」と読めば、「白得レ利」と書く也。言意は、彼の法師、文盲不通にありながら剃髪染衣の姿になりて、なまなか人を利益する事を得ると思ふかと、殊の外にあなどり謗りし詞也。

こうなると、まさしく深読みである。「しろうるり」を「白得レ利ヲ」と読み下せば、盛親がかの法師を謗って、「おぬしは学問もないのに、なまなかに人を利益することができると思っておるのか」との気持ちを込めて発した言葉だと読めるというのである。だんだんわけが分からなくなってゆく。

さらに「和歌秘伝抄」（横井金男『古今伝授の史的研究』五六一頁）に載る一説。

一説に美女の貌をさして云ふ。

「しろうるり」のような美女の貌とは、どんなものだろう。色白で肌がつるりとした美人の顔だろうか。しかしここは僧（男）に向かって言っているわけであるが。

ままよ、こうして「しろうるり」の伝授はその内容をめぐって実に様々な説が交わされたことを知る。そしてそのようなことが伝授という名でまかり通り、それゆえにその真意をめぐって真面目な討論が繰り返されていたと思えば、何とも面白いことではないか。

むすび

かかる珍説・奇説の横行を端で見て、それを冷笑していた人がいる。それは難波の沙門契沖（けいちゅう）である。契沖といえば『万葉代匠記』『勢語臆断』など、後の国学ひいては現代の国文研究にもつながる帰納的・実証主義的な手法で、旧来の古典学を刷新した人。彼の言はさすがに、これまでの人々とは一味違う。

しろうるり、是を此草紙の大事などいふもの、笑ふべし。此国の季世のくせなり。万物の名はみづから名乗らず。皆、人の付たる名也。此僧のかほ「白うるり」と付たるは、盛親のはじめて付たる也。もし、かくのごとくの物出来たらば、それ則ち「白うるり」ならんと也。

「三ヶの大事」のような秘伝主義を、「此国の季世（＝後の世）のくせ」と言い、「しろうるり」を盛親の造語として、そこに何の深き意味をも求めないのである。契沖の生きた元禄という時代は、中世以来の秘伝主義的な歌学の学問体系が、少しずつ切り崩され始めた時期であった。斯界で最も権威ある古今伝授においても、それは例外でなかった。まして況んや、その付属物でしかない徒然草伝授においてをや。

同時代の宮廷の有職学者野宮定基（さだもと）が、その友人と徒然草の読書会をした時の覚書である『徒然草刪翼（ささんよく）』（宝永六年写）には、

松永貞徳、妄りに以て人を衒わんことを欲し、此の言を成す。…失笑に堪ふ。

ともある。「三ヶの大事」は貞徳が人に知識をひけらかさんために創設したものとの見解である。貞徳が「三ヶの大事」を師である中院通勝から授かったと言っていることは先に見た通りで、もしそれが本当ならばとんだ濡れ衣であるが、世の中にはこれを貞徳の創設と見る者も多かった。例えば少し時代が下るが、江戸中期の有職学者伊勢貞丈の『安斎随筆』巻二九には、

貞徳が徒然草に三ヶの大事など云ふ事は、潤屋の為なるべし。三ヶの秘事、何の事もなく知れたる事なり。

などと批判されている。貞徳が「潤屋」（金儲け）のために

創設したというのである。何やら俗臭芬々たる、腹黒い歌学者像が思い浮かんでくるではないか。その上、秘伝の内容が雅びやかなものならともかく、「しろうるり」などという人を食ったような秘伝などであるから、余計にイメージが悪い。

貞徳先生の被った冤罪にしばし同情の念を催すのであるが、しかし彼の直弟子の磐斎が次のように言っているのを見ると、果たしてこれは冤罪と言えるのかという疑いも出てくる。

此事、予聞きし頃まではさやうにはあらざりしが、後に三ヶの秘説とやらん、貞徳の定め給ひしとて秘る事なれば、記さず。（第二八段）

すなわち、自分がこの講釈を聞いた頃までは秘説とは言っていなかったが、後に「三ヶの秘説」と言って、貞徳翁がお定めになったこととして皆が秘するようになったので、自分も記さない、と磐斎は言っているのである。となると、やはりこれは貞徳が創設したことになるではないか。真相は藪の中である。

しかし筆者は貞徳贔屓の人間である。よしんば貞徳が嘘をついていたとしても、それは江戸初期の京都の市民階級に学問の道を開こうとした、彼の深謀遠慮であると見たい。世阿弥に「秘すれば花」という名言がある。古今集・伊勢・源氏、一流の古典にはみな伝授が備わっていて、それが学問の正統性を十分に保証してきた。徒然草を「新しい古典」として普及させようとした貞徳が考えたのは、このようなまことに中世的な、ただし少々時代遅れの紹介の仕方ではなかったのだろうか。

元禄四年刊『徒然草絵抄』（部分）